奏楽者の風箱♪

No.42　2026.4

発行：日本聖公会北海道教区礼拝委員会

音楽と礼拝

司祭　ノア上平　更

やむを得ない事情から、聖歌を全く歌わないで礼拝を行うということがあると思います。奏楽者の不在や礼拝時間の短縮という現実的な理由から感染症対策まで、理由は様々です。数年間続いたコロナ禍の間は、ほとんどの教会で聖歌を歌わないという対策を設けていたと思います。

この「賛美禁止」の期間中、私は礼拝に言いようのない間の悪さを感じていました。前奏に始まり、入堂聖歌、昇階唱、奉献、陪餐後、退堂、後奏、これにさまざまなチャントが加わり、司式する者、応答する者、そして音楽のタイミングが礼拝全体にある種のリズムを創り出しています。身体でたとえて言うと、礼拝全体の骨格がみ言葉と聖餐であり、その表情を豊かにし、動きをなめらかにしてくれる関節や筋肉にあたるでしょうか。それが無くなってしまったのですからひとつひとつの動作、司式者・会衆の応答が不自然に感じられるのも当然のことでした。

この時あらためて、礼拝における音楽の存在は、司式団の動きを読みながら様々な間を埋めたり、与えられたみ言葉への応答としての会衆の賛美の声を導いたり、礼拝前後のひとりひとりの心を整えて、より豊かな礼拝体験をすることができるように、司式団、会衆の心と動きに寄り添い、教会暦の期節感？や、主日の意図、説教で語られるメッセージに深みを与えてくれるものだと感じました。

奉仕している今金の教会には現在、オルガンを弾ける方はおりません。しかしヒムプレーヤーを用意し、礼拝の流れに合わせて聖歌を流し、また陪餐中やその後の聖卓を整えている間にも曲が選ばれて、場の空気を止まったものではなく、祈りのメロディーと共に過ごす時間を創り出してくださっています。私がリクエストしたわけではありません。担当する信徒の方が、礼拝奉仕の祈り、捧げる思いから用意してくださった「奏楽」は、機械の音を通していても、神への賛美の応答として聴こえてきます。

中部教区より

オルガニストの集い 報告

中部教区礼拝音楽部員
一宮聖光教会　キャサリン　水谷　百合

長野聖救主教会

中部教区礼拝音楽部では、年に一度＜オルガニストの集い＞を行っています。以前から『シンプルスコア』を配布して紹介していましたが、実際に弾いて歌いたいという声がありました。2025 年 9 月 13 日（土）、12 時 30 分～13 時 45 分という短い時間ではありましたが、長野聖救主教会にて行われた＜オルガニストの集い＞でシンプルスコアを弾いて歌いました。課題聖歌として 261，310，455，434，491 を選び、参加者に 1 曲選んで弾いていただきました。6つの教会から聴講者を含めて10人の参加者がありました。

最初にシンプルスコアの使い方、ポイントを説明しました。右手（ソプラノ）と左手（バス）各 1 音で弾けるように作成してあること、前奏としてどの部分を弾いたらよいかも書いてあること、指番号は歌詞を活かすようにふってあること、楽譜だけでなく練習のヒントが合わせて載っていることをお伝えしました。

その後実際に弾いていただき、聴講者も含めた参加者で聖歌を歌い、お互いに気が付いたことを伝え合いました。例えば 261 ではメロディーが切れないように気を付けて指を置き換える、434 では「間」をとれるように言葉の切れ目をよく確認しておく、455 では大きく2拍に数えて重くゆっくりになり過ぎないように、491 では指使いは自分の弾きやすい指に換えてもよいが楽譜に記入しておく等の意見やアドバイスが出ました。

最後に感想をお聞きしたところ、保育園や幼稚園の先生や子どもが奏楽の練習を始めるのによく奏楽者の裾野を広げるのによいのでは、シンプルスコアが合っている曲は曲が活き活きしてくる、書いてある指使いだと弾きにくい曲もあった、二声だと会衆をリードする曲としての力に不足感がある、等の率直な感想が出ました。　（次ページへ）

中部教区では少ない人数で奏楽を担当している教会が多く、このように奏楽者が集まって日ごろの悩みを共有する場は貴重です。奏楽を始めたばかりという方からベテランの方まで参加されていましたが、それぞれに気づきのある会になったのではないかと思います。4声である程度弾ける方にとってシンプルスコアはかえって難しいようで、それを弾くことで「歌う人のために弾く」という奏楽の基本に立ち返るきっかけになりました。

シンプルスコアを定期的に作成してくださる北海道教区の方々に感謝です。今後もこのお働きの上に神様のお恵みがありますようにお祈りいたします。

（編集者より）

中部教区ってどこかわかりますか？愛知県、岐阜県、長野県、新潟県の４県にまたがる教区です。植松誠主教が今いらっしゃる岡谷聖バルナバ教会も中部教区です。植松主教はこの研修会の会場となった長野聖救主教会で隔月に1度、主日礼拝の司式をされています。

長野聖救主教会は 1892（明治 25）年カナダ人宣教師ジョン・ゲージ・ウォーラー（J.G.Waller）師により創立されました。写真でもわかるように、レンガ造りの美しい教会（1898（明治 31）年に聖別）で、現在も長野県最古のレンガ造りの教会（重要文化財）として人々に愛され、親しまれているそうです。

シンプルスコアが津軽海峡をこえて教会やご自宅など様々な場所で使われていることを耳にして、うれしい限りです。中部教区では研修会でも用いてくださり、びっくりです。著作権の関係もあり、どの聖歌でもシンプルスコアにすることができるわけではないのですが、毎年少しずつその数がふえて、必要とされる方々のところへお届けすることができるのはうれしいことです。鍵盤楽器初心者の方のみならず、最近はご高齢になられて4つの音（和音）を同時に抑えるのが大変になってきた、という長年ご奉仕されてきた方が、「シンプルスコアならまだご奉仕できるわ」と言ってくださり、賛美の歌声を支えるお手伝いができていることに感謝の気持ちでいっぱいです。これからも作成を続けていきたいと思っています。現在配布可能なシンプルスコアの一覧表と入手方法をお知らせしますので、どうぞご活用ください。

鐘をたずねて

―今金インマヌエル教会―

今金インマヌエル教会　パウラ　山崎二三子

今金インマヌエル教会は田園に囲まれた農村地帯に在り、ゆったりとした時の流れと共にちょこんと建っています。

1891 年（明治 24 年）志方之善ら 10 名が、クリスチャンの理想郷を求め開拓・入植し、1893 年には京都からの団体入植者も加わり「インマヌエル村」と定められました。村が機能し始めた頃、志方の妻 荻野吟子（日本初の女医）も合流し 1896 年（明治 29 年）初代インマヌエル聖公会の教会が建立されました。その後 1939 年（昭和 14 年）に宗教団体法が発令され、時代の波に翻弄されながらも 1954 年（昭和 29 年）日本基督教団より復帰し、日本聖公会今金インマヌエル教会となりました。

現教会は三代目で、寒冷地高床式コンクリートスラブ方式にて建立されています。その三角屋根の上にある小さな鐘楼に鐘が３つ有り、司祭が礼拝の直前に鳴らして下さいます。又、様々な来教者の皆さんからのリクエストにお応えして鳴らす時も有り、鐘の音を聞いた方々は皆「凄い、ずっと聞いていたい。また来ます。」とうっとりされます。

鐘の由来や歴史背景等を調べては見たもののそのような記述も見つからず、唯一の信徒長老に尋ねるも記憶は夢の中・・・。でも、この鐘の音が今金インマヌエル教会の過去とそしてこれからの未来を繋ぐ道標と成ることは確実でしょう。

聖歌の生まれるところ

函館聖ヨハネ教会　セシリア　丸山悦子

「私はあなたに信頼しています。歩むべき道を知らせてください。」　　詩編143編8節

今年の宣教標語にもとづいて選ばれた教区の今年の聖歌は533番「主を愛そう　こころこめて」です。もう、歌ってみられましたか？素敵な歌ですね。

スコットランド西部の港町オーバンに車を置き、大きなフェリーに乗りました。穏やかな海を渡ってマル島へ渡り、さらにバスに乗り換えて島の北から南へ、車もすれ違えないような細い道を進みます。その先に見えてくるのがアイオナ島です。最後は小さなボートで渡りました。オーバンから4時間ほどかかったでしょうか。アイオナ島は、長さ5キロほどの小さな島です。563年、アイルランドから聖コロンバがこの島に渡って修道院を建てたと伝えられています。現在ここには、アイオナ・コミュニティーという超教派の共同体があります。1938年、ジョージ・マクラウド司祭が教会から十分に顧みられていなかった失業中の貧しい人々への働きを始めました。彼は数人の男性とともにアイオナに入り、廃墟となっていた修道院を再建しました。この再建は単に建物を修理するということではなく、共同体の生活や社会を立て直すことの象徴となりました。壊れかけていた人々の生活や社会、そして教会のあり方を立て直すことを表していたのです。日常の生活そのものが神様への奉仕であり、働くことも、礼拝することも、どちらも神様に仕えることなのだと気づかされたのです。その後、共同体は成長し、現在では英国内のみならず世界中から人々が集まる場となっています。

1990年代の終わりに、夫と私は英国で数年暮らしました。どうしても訪ねてみたかった場所のひとつが、このアイオナでした。遣わされていた教会で私はオルガニストして奉仕する恵みにあずかりました。日本の教会ではどんな聖歌を歌うのかと尋ねられ、メロディーを口ずさむと、「まあ、なんて懐かしいメロディーなの！」と言われました。当時、日本では1959年版の古今聖歌集を使っていましたので、新しい聖歌をあまり知りませんでした。英国では、それまでとはまったく雰囲気の違う新しい聖歌にたくさん出会うことができました。欧米では1970年代から「ヒム・エクスプロージョン」と呼ばれる、聖歌が数多く生まれた動きがありました。アイオナ・コミュニティーでも多くの聖歌が作られました。生活を共にし、宣教の働きをしている人々が、自分たちの礼拝にふさわしい聖歌を作りたいと願い、その中から生まれてきたのでしょう。今年の北海道教区の聖歌533番もアイオナ・コミュニティーで生まれた聖歌です。働きながら、祈りながら、みんなで一緒に歌うための聖歌なのだと感じます。

北海道教区は宣教150年を記念して、「ピリカ・レラ・モシリ」という素晴らしい聖歌を与えられました。これまでの先人の苦労に思いを寄せながら、この広大な北の大地に今も降り注ぐ神の愛と、聖霊の風をうけて、私たちは手を取り合い、これからも歩んでいきます。そのような私たちの今の生活と礼拝にふさわしい聖歌だと思います。今年5月の教区礼拝では、533番「主を愛そう　こころこめて」と「ピリカ・レラ・モシリ」を皆さんと共に高らかに歌い、神を賛美し、神様が備えてくださる道を共に歩んでいきたいと思います。

礼拝委員会より

祈祷書改正続行中

私の祈祷書

私は、1990 年に刊行された現行祈祷書を2冊所持しています。1 冊は、私が洗礼・堅信を受けた時、母教会の札幌キリスト教会からお贈りいただいたもので、裏表紙に「2002．12．25 主教 ナタナエル 植松 誠」というサインがあります。かなり状態がくたびれているのですが、今でも愛用しています。この祈祷書を見る度に、初めて祈祷書を手にした時の感動が蘇ります。「揺り籠から墓場までの全ての祈りが、この一冊の祈祷書に収められている。そして小さなルブリックには、大切な意味を持った言葉が記されている。祈祷書は、まさに優れものだ！」これが初めて祈祷書に出会った時の、私の印象です。

2冊目の祈祷書は、私が神学院に入学してから、最新の訂正版が必要になり、神学院で購入したもの。「2019 年 7 月4日 聖公書店より聖公会神学院にて購入」というメモが裏表紙に記録されています。毎日の礼拝の中での祈りの応答で、今までは聞いていた部分を読まなくてはならなくなり、不慣れさと戸惑いを感じたことを覚えています。祈祷書は、いつも私の身近にあるものと、この2冊の祈祷書を手にしながら思います。

そして今、新たな祈祷書の準備が進められています。そのメインテーマは、「LIFE の共有」であることを笹森主教からお聞きしました。それはまさに、「私が、今、ここにあることの、LIFE の共有」であるように思います。その現代的文言に慣れず、流れるような流暢な運びにはなりませんが、新しいことばに出会い、新しくされる喜びを感じられる祈祷書改正であるように祈っています。

（礼拝委員 司祭 エリサベト 三浦千晴）

中部教区からの報告によって、シンプルスコア作成の励ましを頂いたように感じ感謝です。今年の聖歌533番はシンプルスコアの作成ができないので、歌う時のヒントをお知らせします。フレーズの歌い始めの休符をしっかり感じましょう。また、メロディーラインに半音下がる箇所、飛ぶ箇所、があるので、音程に気をつけましょう。歌詞をしっかりと読んでから歌いましょう。のんびり歌っているとメロディーにおいて行かれますよ。おためしあれ。

ニュース、質問等、皆さんの声をお待ちしています。

情報箱 投函先
郵便：040-0054 函館市元町 3-23 函館聖ヨハネ教会 教区礼拝音楽情報箱
FAX：0138-23-5656 （函館聖ヨハネ教会）
E メール：e-k-maru@msb.ncv.ne.jp（丸山悦子）